昭和61年度日本気象学会秋季大会

シンポジウム「黄砂」の報告

昭和61年度日本気象学会秋季大会のシンポジウムは，黄砂がテーマに取りあげられた．シンポジウムの進行は高木増美教授（名古屋大学）がつとめ，

村山信彦(衛星センター)：黄砂の舞い上りとその輸送

荒生公雄(長崎大学)：日射観測からみた黄砂

岩坂泰信(名古屋大学)：黄砂粒子の輸送と輸送途中で見られる物理・化学的変化

が，話題提供された．さらに，コメントが，

中島映至(東北大学)：黄砂の放射特性

田中豊顕(気象研究所)：氷晶核としての黄砂粒子

のようにつけられた．

シンポジウムのタイトル〝黄砂〟は，名古屋大学水圏科学研究所の小野晃教授がコンビーナーとなって準備されたものであり，シンポジウムのはじめに小野教授より〝黄砂がテーマに選らばれた経緯や，各演者の話題をどのように聞いたら楽しくなるか〟イントロダクションが与えられた．テーマを決める途中では，「ザ・黄砂」と言う案もあったとかで，地元の企画関係者の意気込みが感じられた．

トップバッターの村山さんは，都合が悪く代理の方の講演であったが，「いかにして黄砂粒子が大気中に舞い上るのか？」という古くからの問題についてレヴューされた．今日でも，黄砂の発源地とおぼしき所での調査はまだまだ行きとどいておらず，地表面わずか数ミリメートルで論じられる現象と粒子が6km も 7km も舞い上って行くスケールの現象を統一的なイメージをもって理解するには多くの研究がこれから先も必要のように思われた．

荒生氏の発表は，最近気象集誌に発表された論文をもとに行われた．スライドにうつし出された長崎市内の影色を示しながら，「この山が見えなくなると，気象台の方でも黄砂ありと報告されることが多いのでありまして……」と言われるのを聞いていると，氏の地の利を生かした研究材料が黄砂であるというのが実感としてうなずける．氏の研究のポイントは，全国各地の気象台の日射観測データをもとに，黄砂粒子の列島スケールの分布や輸送量を見積もったものであった．

地元の岩坂氏の発表は，黄砂の化学反応や物質循環に視点をおいたもので，最近の観測に材料をもとめたものであった．水圏研グループが観測した黄砂は，ハワイでも観測され，しかも「太平洋上に舞いおりた黄砂粒子はプランクトンの餌食となりやがてフンに混って海底に急速落下する」と言う下りでは会場の笑いをさそっていた．ひとたび化学物質と言う視点を持ち込むと，最近のCO_2やオゾンの研究でも同じだが，関連する領域がひろがって行き，思わぬ所にぶつかるのはおもしろい現象である．

コメントをつけられた，中島，田中両氏の講演は，コメントと言うより独立の講演として開いて良いもののように思われた．中島氏のものは，内外の研究をレヴューされ，リモートセンシングに話がおよんだ．田中氏の発表は，氏自身の観測や実験で得られた結果を材料に使われ，古くからスタートした「黄砂粒子の氷晶核としてのふるまいに関する研究も，一段と精緻なものになりつつあるフェーズを迎えている」ことがうかがえた．

講演のあとの討論では，リモートセンシング法あるいは，受信信号の解釈と言った点に集中した感があった．黄砂時期に，黄砂の中に混って（?!）自由に観測出来ないという現状を考えると，リモートセンサーにかける期待はまだまだ大きい．このような事情を反映した討論の如く見えた．

今回のシンポジウムでは，シンポジウムの予稿集をあらかじめ配布し会員各位がスムースにシンポジウムに参加出来るよう試みた．ネライがうまく行ったか否かは調査していないのでなんとも言えないが，黄砂シンポジウムを企画した側の熱意を感じとっていただければ望外のよろこびであります．

黄砂シンポジウム企画委員会

（コンビーナー：小野　晃　名大水圏研）